

1 安全、特に気象判断についての基本

「少しでも」不安があれば乗艇しない、といわれることがあります。しかしそれでは安全機能は育たず「潜在的危険」を増やすだけです。「絶対の安全」はありません。全く不安のない乗艇という場合は、何か見落としがあるといえます。指導者だけでなくクルー自身が、乗艇の準備状態や気象条件を点検しましょう。出艇判断を人任せにははいけません。「気象予報や自分たちの判断・予測は外れることがある」ことを前提に、行動しましょう。楽観視は避けるべきです。

2 出艇の決断

リスクとは別に、出艇の「決断」は明確でなければなりません。その乗艇が、①気象や環境については「ほぼ」危険のない状態なのか、②明確なリスクがあるのか、③待機すべき状況なのか、④あるいは乗艇を中止すべきなのか、です。

3 気象予測

最近では気象情報の精度も上がり、情報も、TV、ラジオ、電話（177）などで容易に入手できます。当日の気象リスクのレベルを把握しておきましょう。また「実際に空を仰ぎ、大気からのメッセージ、数時間後の局地的な気象変化を聴こうとする姿勢」、いわゆる「観天望気」が何より重要です。

観天望気とは視覚情報だけではありません。視覚的な制約があっても、自分を直接取り巻く空気の感触もとても重要です。風、気温、湿度、日差しの感触などを、自分のもつ感覚機能を最大限に活用して捕らえようとようとする意識が大切です。「現在の穏やかなコンディションが、後どれだけ続くのか？」様々な自然からの情報を読み、予測と評価を繰り返し、予測水準を向上させましょう。

波と突風：ボートでは、波と風、突風が大きなりリスクとなります。低気圧や前線の接近、潮汐と風向の関係など、ここでは詳しく述べませんが、基礎的な知識を身につけておきましょう。また乗艇中、常にその変化に神経を研ぎ澄まし、急に悪化しても岸まで帰り着く時間の計算ができるようにしておくことが何より大切です。長い水域では退避可能な場所をたくさん確保しておくべきです。

落雷：ボートの落雷・死亡事故が、南アフリカで高校生エイト、中国でシングルスカルの2例があります。落雷については、間違っただけの言い伝えも多くあります。平坦な水面上では、ボートは雷の恰好の標的で、有効な防護手段がありません。雷が鳴ったら、いかなる場合も乗艇すべきではなく、また雷鳴が止んでから約30分は様子を見ましょう。乗艇中に雷がなり始めたら、早めに岸や橋梁の下に待避することが大切ですが、大木、塔、橋脚などからは4m以上離れるべきです。近くに落雷し「かなり危険」と感じられる場合には、あまり動かさず体を伏せて静かに待ちましょう。